

千里国際学園 中等部・高等部

新シリーズ「Authentic Opportunities 本物に触れる教育」

第2回 千里国際（SIS）の授業

校長 眞砂 和典

海外に出て学校を選ぶとき、現地校かインターナショナルスクールか日本人（補習）学校をどうするかと悩まれた方も多いのではないかと思います。しかし、日本に帰るときにはインターか一般の学校（ほとんどの帰国子女受け入れ校は入学枠があるだけの一般の学校だ）か、というだけではなく、千里国際学園という選択肢がある。

<学期完結制>

あなたが日本に帰国してから必要なことは何だろう？ どんな勉強をしたいのだろうか？ それはあなたの将来とどのように繋がって行くのだろうか？ あなたが学んできたことを生かすにはどうすればいいのだろうか？ こんなことを真剣に考えて学習カリキュラムを作ったら「学期完結制」(Term Course System) というものができた。しかし、それは帰国生だけのためのものではなく、国内の一般生や留学を考えている生徒、更に、いくつかの科目を一緒に勉強している大阪インターナショナルスクール (OIS) の生徒達にとっても都合がよい。そして、日本の学校に足りなかった自律的な学習を進めるよい方法であるということも判ってきた。

本校が採用している授業システム、学期完結制は次の3本の柱から成り立っている。

1. 学期完結制
2. 自由選択制
3. 無学年制

これらの説明をしよう。

1. 学期完結制

学期完結制では1年に3回の新しいスタートがある。中等部3年生から上の学年では9月に編入してきても、12月でも、もちろん4月でも、編入生が在校生と一緒に新しい学習を一から始めることになる。途中からの参加ではない。数学を例にとって説明しよう。数学Ⅰをふたつに分け、どちらからでも始められる、ⅠαとⅠβ、同様に数学Ⅱを分けたⅡα、ⅡβとⅡγ、そして数学A、数学Bという、主に高校2年間で学ぶ数学の科目は毎学期開講されている。これらすべてが1学期で完結する授業になっていて、全生徒が自分の進度に合わせて、どこからでも、いつからでも勉強できるようになっている。詳しくは本校ホームページの「開講科目の検索」というサイトを見てもらいたい。ここにすべての授業の内容が書かれている。授業担当者の名前もできる限り知らせるようにしている。このようなものがあること自体が授業を大切に、個々の生徒の選択を尊重している学校の姿勢の表れだ。

2. 自由選択制

自由選択制を活用し、高等部の生徒達は自分に必要な科目を組み合わせて1学期ごとに自分だけの時間割をつくる。これが帰国生にとってなめらかな学習の繋がりをもたらすことは十分に理解して頂けると思う。更に重要なのは選び取る能力を養うということだ。学期ごとに自分の学習を見つめ直し、それに連なる自分の将来をじっくりと考えながら学園生活を送るうちに、自分で自分の道を切り拓くという姿勢が育っていく。人に言われるまま、みんなと同じようにやっていたら無難に時間が過ぎて行くという、これまでの日本の学校や社会はもう行き詰まっている。教職員は、生徒達が自分の将来を見つめ、自分で道を切り拓く力をつけるという方法を伝えることで生徒の将来に関わりたいと思う。個性豊かな、自立した本校の生徒にとっては自然なことなのだろう。それは卒業生の「多彩な進路」によって証明されている。(こちらホームページをご覧ください。)

3. 無学年制

海外校から来た生徒達に最も適合する授業が1学年の枠に収まるはずがない。日本人学校や国内からの生徒達も大変個性的だ。生徒ひとりひとりの個性を生かすためには、学年の枠を外す、無学年制が必要になる。幅広い選択肢の中から、取りたい授業を、取りたい時に、選ぶとしたら、それはもう横並びになるはずはない。同じ授業の隣の席に別の学年の生徒が座っているというのは一般の学校では非常に抵抗が大きいであろうが、本校ではこれを乗り越えた。日常の光景だ。多くの人々がこのシステムの意義を理解してくれたからだと思う。異質な他者との違いを認め、尊重し、受け入れ、学び合うという千里国際学園の理念はここでも生きている。この学校では授業以外にも学年を越えた交流が多く見られる。先輩後輩をそれほど強く意識しないで済む異年齢間の交流は兄弟姉妹が少なくなった現在では貴重な経験となるだろう。

このような授業のシステムによって帰国生が現地で苦しみながら身につけた力、自ら学ぶ姿勢や豊かな表現能力が更に磨かれていく。日本の多くの学校では積極性や自己主張は嫌われ、